

第二期 第七十八号 (二版) (無料)

音信不通

本のビオトープ

2023. 01. 20 定有堂書店 発行

三砂慶明さんとの一夜
なにも言えない日記

「葬られた思想家」の座右の銘をめぐって

汽水のほとりから (22)

やる気のない方々

デイベートをめぐって

島成郎と安俊弘

散歩嫌いの記

鳥取あれこれ その七十七

八代日記 (三十四)

「見栄っ張りな風物詩」亦是「大苦狂騒楽」

ままならない体と動き続ける心

お酒

…… 編集後記



ムラカミヒロミ

内田 克彦

齊藤 仁昭

秦阜 梅林

三浦 永理

あぎの素生

奈良 敏行

鳥居 貴彦

岩田 直樹

小原 修治

萩原 俊郎

松田 裕史

芝野 浩貴

三砂慶明さんとの一夜

奈良 敏行

(定有堂 店主)

大阪で「読書室」を主宰する三砂さんが、定有堂教室「ドウ
ルーズを読む会」に参加してくれた。十二月十五日の十四
時に特急で鳥取駅着。改札口まで出迎え、構内で夕食用に
駅弁を購入。そのまま定有堂近くのカフェへ移動。十八時
にホテルチェックイン。十九時から二十一時半まで読書会。
その後気がつけば深夜二時半まで語り合っていた。

三砂さんは『千年の読書』という著書で本と人との出会
いを語り、『本屋という仕事』では編著者という立場で、
複数の書店人の仕事への意識を問う試みをしている。今現
在のテーマは「読書」と「読書会」ということだった。読
書会の現場を体験するという目的の訪問だった。

定有堂教室「読む会」は一九八八年に始まり三十五年続
いている。九年後に講師が亡くなり現在は岩田直樹氏が課
題本を選んで読んでいる。時々の社会思潮を視野に入れた幅広く
深い選書だ。読んで参加することを条件にしない緩い

読書会でもある。選ばれたテーマ自体が誰でも関わることのできる問題を取り上げているからだ。コロナ禍でふれあいを求める人が増えたせいもあり、春から秋にかけて休会が続く。

一方、コロナ後を見据えて読書の体力を養っておかねばという危機感もあり、発想を変えて関心は狭いが密度の濃い、哲学者のドウルーズに挑んでみることにした。岩田直樹さんを中心に縮小版の読書会を十月から隔月で開始した。三砂さんが参加したのはこの少数の集まりの「ドウルーズを読む会」だった。

会の終了後、駅弁をいただきながら、三砂さんと語り合った。わたしは彼の一言一句に耳を傾けながら、青年の頃を思い起こし、影響を受けた「テスト氏との一夜」が目につかんだ。語ることによって形のないものが形になる。テスト氏は可能か？と問うこと自体が人をテスト氏にする。その「可能性の魔」がテスト氏であり三砂さんだ。三砂さんは「読書」と「読書会」から始まるものを熱意を持って語る。ここからなにかが始まっていいはずだし、現に始まりつつあるようだ。「読む会」は三十五年続いているが、わたしは人の集まる場そのものに満足しているので、読書の体験についてきちんと考えたことはなかった。

三砂さんは読書の可能性の魔にかけている。本気度の高

い読書会、例えば向井和美『読書会という幸福』もあるよと教えてくれた。店頭では十冊ほど売っていたがわたしは読んでいなかった。読者より半歩先んじて仕入れるが、読むのは数歩遅れるのがわたしの習性だった。仕入れて人に勧めるが、読むのは読んだ人に勧められてからだ。そこでは「人を殺さずにいられたのは、本があつたから、そして読書会があつたから」と語られていた。取り上げられる著者も「ポケットに石を詰めこんで入水した」ような人たちだった。すごい強度の読書会だと思った。

三砂さんは「読む会」はフィクションは読まないんですか？と尋ねた。そういえば読んだことは少ない。もちろん岩田直樹さんが選書するのだが、いままで一度も誰も疑問に思ったことがない。なぜだろう？店頭でも小説はあまり重視していない。関係あるのだろうか？

「なにかオススメの本がありますか？」と三砂さんに聞かれた。前回訪問の時は高村友也『スモールハウス』や西村佳哲『自分の仕事をつくる』だった。今回は一日語り合った流れから、山内志朗『目的なき人生を生きる』を選んだ。どこまでも結論のない不思議な本だ。

《〈私〉とは個物だから、個物に定義はない。定義があるのは個物ではなく、それらを取りまとめた「種」という一般的な事物に対してなのだ。》

個には概念規定がない。だから目的もない。「形相の中に目的はない」「目的が後から現れる」「欲望は原初形態において対象を持たない」という主張なのだ。欲望を肯定する思想だと思う。わたしのドウルーズへの関心もこの場所から始まった。

本を読むという三砂さんの欲望は、原初形態において本当は対象を持っていない。でも、本抜きで人生が幕を開けるはずがない、という三砂さんのこの可能性の魔にかける意気込みは、きっと人を動かすだろう。

2022.12.22

三砂慶明 『千年の読書』 誠文堂新光社 2022

三砂慶明 『本屋という仕事』 世界思想社 2022

ヴァレリー 『テスト氏・未完の物語』 現代思潮新社 1967

向井和美 『読書会という幸福』 岩波新書 2022

高村友也 『スモールハウス』 ちくま文庫 2018

西村佳哲 『自分の仕事をつくる』 ちくま文庫 2009

山内志朗 『目的なき人生を生きる』 角川新書 2018

定有堂教室「読む会」 (岩田直樹氏 選書)

毎月一回 火曜日 詳細は店内掲示

定有堂教室「ドウルーズを読む会」

(講師 岩田直樹氏 公立鳥取環境大学特任教授)

太極拳教室(会場 定有堂三階) 葉香クラブ(荷葉)

毎週 水曜 十九時半から ・土曜 十三時半から

講師 日本武術太極拳連盟 四段 公認A級指導員

なんにも言えない日記

鳥居 貴彦

(開風社 待賢ブックセンター)

いつの間にか七五三を終えていた息子がサンタクロースに手紙を書いている。手紙と言っても紙が大きすぎるのでもうポスターといつてもいいサイズ。堂々とした願いごと。四歳児には欲しいものがあふれている。

彼が初めて書いた漢字は「本」だった。見る角度によっては「あ」にも見える。まるく踊るように波打つ「本」。本は四角形だと思っていたがそうでもないのかもしれない。

日曜日、本屋が集まる催事場のすみっこでぼんやりと立っている。大阪、神戸、京都、沖縄や東京。どの本屋もお店をほったらかしにして会場にきている。みんな本を売っている。そんなにたくさん本は売れないよ、と思う。ぼく

が割り当てられたブースのとなりではトークイベントが行われていた。一日に何組かが入れ替わりに話をする。ぼーっと立っていると「ここ自由席ですか?」「予約してなくても大丈夫ですか?」などと聞かれる。出店者の目印になる名札をつけているのでイベント会場のスタッフに見えるのかもしれない。そんなこと知らないよ、と思いつながらトイレの場所などを教える。

ある組のトークでは本屋の店主が自分の店を始めた経緯を語っていた。本が身近なものでなくなった、本屋がどんどん減っている。危機感を持って本屋をはじめた、とか。えらい。世のため人のために働く人はカッコいい。じゃあ自分はどうかと考えたとき、言いたいことは何もなかった。もしこの場であたなの本屋がどんな場所かを話して欲しいと言われたら、話せることはまったくない。本が並んでいきます。いろんな人が来ます。毎日ランドセルを背負ってやってくるきよちゃんはまだじき二年生になるみたいですが、最近『おしりたんてい』と『プリキュア』がお気に入りです、という話ならできる。ほかに本当になにもなかったのがある。なにもない状態を大切にしたい。

また別の組のトークでは飲食店のライターを続けてこられた方が長く続く店の魅力について語っていた。雑誌に取り上げられるのは新規オープンや奇抜なメニューのお店。

だが長く続くのは日々淡々と開けている店だ。言葉にしなくても滲み出る店の風格。毎日毎日繰り返す店主のこだわり。そんな店に魅力を感じるというような話だった。いやもっと別の話をしていたのかもしれないが、ぼくの耳に届いたのはそんな言葉だった。話を聞きながら今ぼくがい wanna 欲しいのは「歴史」じゃないかと思つた。なんでそんなことやってるんですか、と聞かれても「さあ…これですつとやってるからねえ」としか言いがたない歴史。「あの人昔からあだから」と言われてしまう歴史。欲しがって手に入るものではない。でも、言い続けていたらいつかなんとかなる気もする。誰かが急にくれたらいいのに。

寒い店の玄関で「地図帳ないかあ」とおじいさんが大きな声を出している。「テレビとかな、見てたらほら気になるやろ、どこの国がどうか。」確かにほくもモロツコがどこにある国なのか気になっている。しかし今ここにあるのは座布団くらいあるでつかい函入りの地図帳だけだ。「これはでかいなあ…」とおじいさんも困惑している。それはそうだろう、このサイズに困惑しない人はいない。なんか見繕って探してみますねー、と言うと「お願いします」とおじいさんは帰っていった。とりあえず帝国書院のホーム

ページを開く。地図帳って高いなあ。思ったよりもいろんな種類がある。「TVのそばに一冊」というそのまんなまのタイトルがあつた。これかー。気づくと結構な時間がたっている。千円ちよつとの本にかける時間と手間。計算したらあかんやつ。利益とは何か。「その大垣書店にあるんちゃいますか」といつてしまうことは簡単だ。本屋同士の役割分担というものもある。でもそういうことじゃないなにかを毎日やっている。なにかつてなにと言われたら「さあ…？」としか言えないのだけれど。

「開風社 待賢ブックセンター」

京都市上京区大宮通樞木町上る菱屋町8-18

「葬られた思想家」の座右の銘をめぐる

岩田 直樹（公立鳥取環境大学特任教授）

「読む会」選書人

『音信不通』の鳥取県外の読者の方には申し訳ないが、今回はローカルな話題を取り上げたい。

本稿が定有堂書店ホームページに掲載のころには決着がついているはずだが、鳥取県中部地区の倉吉市で、二つの小学校（成徳小と灘手小）が統合する際の新校名をめぐる紛糾している（全国ニュースにもなった）。そもそも学校の統廃合はすんなりといかないものだ。校名、校歌、校章（校旗）、通学方法など、もめる要素はいくらでもある。

数年後の統合であれば調整期間に余裕はある。問題は、開校が今春であること、しかも人口の約一割、四千八百余筆もの署名が集まっていることである。

事態を収めるのは政治の力である。地域の未来を担う子どもたちの学びを最優先して、ソフトランディングを願うほかない。

前置きが長くなった。

この問題が取り上げられて以来、ずっと気になっていることがある。新校名候補「至誠」が成徳小の卒業生、橋田

邦彦の座右の銘であったと報じられていることだ。

橋田邦彦とはいったい何者か。精神科医で摂食障害の専門家であった下坂幸三（一九二九—二〇〇七）は、橋田を「葬られた思想家」であると論じた（『フロイト再読』金剛出版、二〇〇七、未読。勝井恵子「橋田邦彦研究—ある「葬られた思想家」の生涯と思想」、日本医史学雑誌、第五六巻第四号、二〇一〇、五二七—五三八頁による）。

私は三〇年ほど前に、思想面に着目して彼について調べたことがある。プロフィールを簡単に記そう。

橋田は、旧鳥取藩に藩医として仕えた漢方医、陽明学者の藤田謙造の次男として一八八二年に鳥取県倉吉町に生まれた。父によって幼い頃から漢籍を読まされて育ち、とりわけ張仲景「傷寒論」と並んで王陽明『伝習録』は彼の思想の出发点となっている。

鳥取県立尋常中学校（現鳥取西高等学校）、第一高等学校を経て東京帝国大学医科大学を卒業した橋田は、日本の生理学の父、大沢謙二教授に師事し一九一四年にドイツに留学する。第一次世界大戦で日本はドイツの敵国であったため、牢獄に七〇日間投じられてしまう。手許にはただ『伝習録』一書があるのみで、繰り返し色読して開悟するところがあった。釈放後はスイスのチューリッヒ大学で研究

を続け、一八年に帰国後は東京帝大助教に就任。生理学講義をはじめようとした彼は「生命とは何か」「生きて居る」とは何か」という難問に突き当たり、多くの書物を漁った末に『正法眼蔵』へ辿り着く。生理学者として『眼蔵』を読み込み自己の思想を熟成させていき、その思想を『碧潭集』（岩波書店、一九三四）で世に問う。高山岩男ら高名な知識人たちによって、この本は好意的に受け容れられた。

橋田はこの一書で文部省の思想官僚の目にとまる。翌三五年に文部省思想視学委員になり、以後思想善導運動のために全国の高等学校、教育会で講演する。やがて文部省思想局長（後の文部次官）伊東延吉の懇請により三七年に第一高等学校校長、四〇年七月に第二次近衛内閣文部大臣（大政翼賛会顧問）に就任。四三年四月に退くまで第三次近衛内閣、東条英機内閣の文相を歴任し、国民学校令に象徴される戦時下教育の最高責任者を務めたのであった。

橋田は文相退任後、四四年に教学錬成所長に任ぜられ敗戦を迎える。四五年九月二日、A級戦犯に指名された彼は、GHQの召喚を受けた九月二四日午後、東京荻窪の自宅で青酸カリによって自殺し六三年の生涯を終えた。

橋田の生涯は、学問が政治に絡め取られるプロセスそのものと言えるのではないか。自然科学の優れた研究者が、

学問の基盤である「生命」について極限まで思索を深め、ついに道元『正法眼蔵』に立脚した「橋田思想」と称するに値する思想を紡ぎ出す。順調に研究・教育の階段を上っていった彼は、政治の論理に翻弄され、弟子たちの必死の説得もむなしく自決する。

紙幅の関係で詳しい思想内容は割愛するが、岩波書店刊行の『碧潭集』（前掲）、『空月集』（一九三六）、『行としての科学』（一九三九）、山喜房佛書林刊行の『正法眼蔵釋意（全四巻）』（一九三九・四〇・四四・五〇、死後刊行の第四巻は未読）などを読むと、『眼蔵』、陽明学をバックボーンに当時の新思潮であった生の哲学（ベルクソンら）、現象学（フッサール、ハイデガーら）などを読み込み、今までにない思想を編み出そうとしていることが理解できる。「上から目線」の俗な表現を用いれば、「かなりいい線を行っている」のである。

新校名問題に話を戻そう。

実は、著作にざっと目を通して「至誠」について語った箇所が見当たらないのである。倉吉市打吹公園の碑文「學道不二 唯從自然」が座右の銘であることは確かだ。

どなたか「至誠」が橋田の座右の銘である文献的根拠をお教え願えないだろうか。

汽水のほとりから (22)

小原 修治

(県立高校教諭 湯梨浜町松崎在住)

何かと話題となるノーベル賞。これに数学賞も哲学賞もないのは有名な話である。ノーベルがこの王道というべき二つの学問に賞を設けなかった理由には諸説あるようだが、数学には代わりにフィールズ賞というのがある。では、哲学はどうか。実はバークルエン賞というのがあったが、私は知らなかった。だから先日、定有堂で奈良さんに「柄谷行人が哲学のノーベル賞を受賞したそうですね」と言われても、全くピンと来なかったのである。もともと、この賞が設立されたのは六年前で、私が知らなかったのも当然かもしれない。ニュースの扱いも、大きくないようだ。

とはいえ、文系受難の時代に、柄谷氏の受賞は快挙だと思う。メディアに言葉は溢れているが、反比例するように、現代ほど言葉が軽く扱われている時代も無いからである。そんな中において、「哲学の文章」というものが確かに存在することを氏の著作は感じさせてくれる。ところが、私

は長らく氏のことを敬遠してきた。知的テイラントだと思っていたからである。が、そうではなかった。氏は本気だったのである。その根底に常にマルクスの『資本論』を読み解こうとする一貫した心持ちがあったからだろう。

柄谷氏は今から二十数年前、「国家と資本への対抗運動」という自身の思想を具現化すべく NAM (New Association Movement 通称ナム) という協同組合を立ち上げ、見事に失敗した。その結果、離れていった彼の信奉者も多かったと聞くが、思想家としては「以て瞑すべし」といえよう。歴史上の思想家、例えば孔子もそうした人の一人である。失敗したからと言って、その思想が必ずしも無力だということにはならない。失敗を恐れず、自らの思想信条を實踐に移す勇氣こそ大切なのである。『論語』にも孔子の言葉として「義を見てせざるは勇無きなり」とあるではないか。

氏のイメージが大きく変わったのは、東京の高円寺で「素人の乱」を率いる松本哉の『世界マヌケ反乱の手引書』(筑摩書房)の書評を読んだ時である。柄谷は松本哉らの生き方をこう評していた。「この状況(*1990年以降)に発生した新自由主義の下での人々の貧窮化(引用者注)に対して、二つの態度がある。一つは、中産階級の基準に固執する「賢い」生き方である。もう一つは、それを放棄した「マヌケ」な生き方だ。／大概の人は前者を選ぶが、そ

れは困難であつて、努力しても実際にはますます貧窮化する。にもかかわらず、他人と交わり、助けあふことはしない。そして、結局、国家に頼り、排外的になる。一方、「マヌケ」たちは寄り集まり、国家にも企業にも依存しないで暮らせるように工夫する」のだと。彼らのマヌケ的な生き方は、実は自身のNAMの姿でもあつた。今年東大で行われた講演会で柄谷は、「私が気づいたのは、「マヌケ」はNAMとつながっているんです。NAMを逆にすればMAN、マヌケの頭文字三文字ですから」と発言している（『文學界』二〇二二年10月号）。これは冗談ではない。

その後、私は今回の受賞理由ともなつた『世界史の構造』（岩波現代文庫）を読んだが、面白かつた。そこには私が長年考えていた孔子の思想を人類史にどう位置付けるかという問いに対する答えが明示されてもいた。私は大いにそのことに驚いた。この彼の主著の内容は、乱暴に言うとなら、マルクスの『資本論』を再考しつつ、社会構成体の歴史を、これまでマルクス主義者が唱えてきた生産様式ではなく、新たに交換様式の視点から説明しようというものである。その際、著者が基本に据える交換様式は、次の四つである。即ち、AⅡ互酬（贈与と返礼）、BⅡ服従と保護（略取と再分配）、CⅡ商品交換（貨幣と商品）、DⅡAの高次元での回復、である。その上で、氏は交換様式Dの到来こそ

マルクスが『資本論』で考察した未来図であつたと説いてた。

では、どうしてこのことが孔子の思想とつながるのか。それはマルクスが未来に見据えた交換様式Dが、既に古代に出現し、儒教はその一つだと考えられるからだ。柄谷は言う。「孔子が説いたのは、一言でいえば、人間と人間の関係を「仁」にもとづいて建て直すことである。仁とは、交換様式でいえば、無償の贈与である。孔子の教え（儒教）のエッセンスは、民族的共同体を回復することだといつてよい。もちろん、それは氏族共同体を高次元において回復することであつて、たんなる伝統の回復ではない」のだと。前も触れたが、柄谷は「伊藤仁斎論」（講談社学術文庫『ヒューモアとしての唯物論』所収）を書き上げている。『世界史の構造』を上梓する二十年以上前のことだ。両者を併せ読めば、仁斎が『論語』に見出したのは、まさしく右に述べられたような交換様式Dとしての儒教だつたと思われる。柄谷は、こうした見方を仁斎が独力で発見したことに驚き、古今東西唯一無二だと見ている。いわば私は柄谷が仁斎に驚嘆したように、柄谷に驚嘆したのである。

やる気のない方々

萩原 俊郎

(倉吉市在住者)

屋根にソーラーパネルを付けよう、と思った。7月上旬のことである。

「カーボンニュートラルの社会に微力ながらも貢献したい」とエコに目覚めたわけでも、「世界のエネルギー情勢で確実に高騰する電気代の節約を」と先読みして手を打ったわけでもない。ただただ「暑かった」のである。

連日の猛暑。照りつける太陽を逆手にとつて、心置きなくエアコンをフル回転させたい。年を取ると暑さの感覚が鈍るという。年金暮らしのお年寄りたちは、電気代の節約もあって「まだまだ、これくらい大丈夫」と言っているうちに熱中症でバタバタ倒れていくそうである。そうなる前に取り付けたい。エアコンの効いた社内に一日いた昔と違い、日中に家にいる時間は格段に長くなった。

◇

◇

◇

当初、設置は発注から長くて一カ月ぐらい、まあ、遅くとも暑さが続く8月中には…と予想していた。ところが、「ソーラーパネルには市から助成金が出るので、まずその申請を」と工務店から言われたあたりから、雲行きがおかしくなってきた。

悪い話ではない、と申請したものの、さすがお役所仕事。待てど暮らせど、受理の知らせが来ない。ようやく返事があったのは一か月後の8月上旬。そこからいよいよ工事かと思ったら、8月も末になって「パネルの納期が未定で…」という連絡。「そうか。コロナ禍で湯沸かし器やトイレの便座などもずっと入荷待ちらしいし、仕方ないな」と独り納得する。なんて性格の好い客なのだろう(笑)。

秋風が吹き始めた9月下旬、工務店から「経済産業省の設置認定に時間がかかっているようです」という知らせ。やっぱり、お役所仕事のせいかな。

◇

◇

◇

10月、「一般社団法人太陽光発電協会」という聞いたこともない団体から突然メールが届いた。「あなたの再生可能エネルギー計画の内容を次の電子申請マイページにログインして確認・承認を」とある。この手の詐欺メールは最近やたら多い。翌日、怪しいメールでないことを業者に確認後、IDとパスワードをなんとか自分で設定して口

グインで来た。パソコンに疎い人は、こんなメールが来たら頭を抱えるに違いない。

11月、ひたすら連絡を待つ。工事が始まる気配はない。「売電」が絡むので、中国電力さんの承認がいるんです」と配電盤を調べに来た業者からちらりと聞いた。

12月、スタッドレスタイヤにはき替えた頃、「工事の足場を組む」という待ちに待った知らせがあった。「途中で雪が降らなければ良いのですけどね」。こちらは皮肉を言うのが精いっぱいだった。

悪い予感通り、雪が舞い始めた12月中旬、パネルが完成した。しかし、発電開始のスイッチはオフのままだ。「中国電力のOKがまだ来ないので」と現場の業者。「太陽光発電は不安定と文句を言うのですが、ソーラーパネルが増えたらその分、彼らは電気が売れない。あまりうれしくありませんですよ」と声をひそめて教えてくれた。

クリスマス前、ようやくOKが下りたらしく、業者がスイッチを入れに来たが、折からの積雪で発電を示す表示はピクリとも動かない。やれやれ。

◇ ◇ ◇
思えば半年に及ぶ「長い旅路」だった。

工務店の名譽のために言うと、彼らも「パネルの後付け工事がこんなにかかるとは想定外でした。新築ついでに設

置る場合がほとんどだったので」と言う。

昨年秋、岸田首相は2050年までに国内の温室効果ガス排出を実質ゼロにする「カーボンニュートラル」を世界に公約した。ところが原発はともかく再生可能エネルギーについては、私が体験した通り、やたら時間と手間を食い、推進する気がまるで伝わってこない。

面白いのはそんな政府を横目に、小池東京都知事があっさり「都内の新築住宅すべてにソーラーパネル義務化」を都議会を通したことだ。自民党や一部学者は「効果が少ない」「使用済みパネルの廃棄が大変」「助成金は法の下で平等に反する」など妙な理屈で反論しているが、経済学者の森永卓郎氏は「いやなに、連中は原発推進派だから騒いでいるんです。大半の住宅にソーラーパネルを付けたら原発なんかいらなくなるから」と見抜いていた。なるほど。久しぶりに日差しがのぞいた。山陰の冬の弱々しい太陽なのに、あつという間にわが家の消費電力を超えて「売電」に切り替わった。さあ、夏が来るのが楽しみである。

ディベートをめぐって

松田 裕史

(高校教員)

高校生英語ディベートの全国大会のジャッジをすることになり、半日の講習を受講。十二月二十四日(土)に初めて大会参加した。オンラインの大会に八十校ほどの高校がエントリー。全国の名門校の名前がひしめいている。

ディベートに殊更関心を持ち、研究してきたわけではない。しかし、今年度の高校一年生から順次施行されている新学習指導要領ではディベートも推奨されているため、最低限の知見は持っておいた方がよいと思い、『中学・高校英語「ディベート入門」(河野周著)を昨年読んでみた。河野さんのオンライン研修も七月に受講。河野さんは英語ディベートを「ある論題に対して、競技者が賛成と反対の立場にランダムに振り分けられ、チームを組んでそれぞれの立場を支持する主張をして、第三者であるジャッジを英語で説得する活動」と定義されている。著書ではディベート前にするべき立論のトレーニングや反論のトレーニング

なども紹介されており、それらはディベート以外にも効果があるので授業でも取り入れてみた。ただ、どうしてもディベートそのものは導入しなかった。

文部科学省はディベートを推奨するが、英語でディベートが成り立つには、ディベーターに高度な英語発話能力が要求される。学習指導要領でディベートを推奨されているとはいえ、現状、日本の高校でディベートができる学校は限られる。また、日本語でもディベートをしたことがない生徒に英語でいきなりディベートをせよと言ったところで上手くいくはずもない。大人でも会議で丁々発止で意見を交換することは稀であるのに教育現場ではそれが要求される。

ディベートを通して生徒が持っている既存の世界観や価値観が更新されるのならばよいが、そこまで指導する自信もない。また、全国的にそこまで到達している実践も見ることがない。特に、今回参加した大会は即興型のディベートなので世界観うんぬんを言う方が的外れであろう。実際にジャッジとして何試合か経験したが、豊かな言語活動が展開されたとは言いがたかった。少なくとも、対話にすらなっていない。肯定側、否定側、どちらも立論はそれなりにするが、その次の反論ができない。英語力の問題もあるが、反論思考が育っていない。立論の立て直しをする場面もそれぞれの立場に与えられているが、立て直しもほぼほぼでき

ない。そうになると、ジャッジとしては最初の立論の部分だけで判断せざるを得ない。(明日の授準決勝以降はこのあたりも解消されると期待したい。)

たしかに、即興型ディベートは準備型ディベートより日々の授業に取り入れやすい。即興型の場合、ディベートのトピックが与えられてから十五分間の準備時間しか与えない。辞書は使つてよいが、ネット検索は不可。指導する教員も事前資料を準備する必要がない。一方、ディープアクティブラーニングを提唱されている松下佳代氏(京都大学)によれば次の五つが学びに深さを生むためのポイントとなる。

「概念を既有の知識や経験に関連づける」「共通するパターンや根底にある原理を探す」「証拠をチェックし、結論と関係づける」「論理と議論を、周到かつ批判的に吟味する」「必要なら暗記学習を用いる」

即興型でも何かしらディベートとして意義深いものとしたいのなら、せめてこれらのポイントのどれか一つに絞って立論を強化し、反論を予想させたい。自分ならそう指導する。

昨日の朝日新聞には、ライターの武田砂鉄が「今年売れた本」という記事が寄稿されていた。毎年、この時期に掲載される記事であるが、今年も読書にもコスパの波が押し寄せていたということだ。曰く、「ベストセラーの多くは

確かに『コスパ』がいい。」映画もファスト映画で済ませ、読書もコスパのいい本。それを踏まえれば、即興型ディベートもコスパが良くてファスト。セラピーとケアで言えばセラピー思考。全国的に流行るわけだ。武田は次のように締めくくる。「単純明快な方向にひた走ると、社会の見方を誤る。目的を果たすだけの読書から、できるだけ距離を取りたい。」英語運用能力を高めるだけの目的であればディベートでなくてもよい。そこに「グローバル人材が…」などという冠がついた所で目の前の生徒の心には何も響かない。河野さんは人間教育的視点からもディベートを考察されているので、単に勝ち負けを競うのが目的でもない。高潔、探求、フェア・プレー、協働、友情の育成がそれである。ドミニク・チェンは『未来をつくる言葉』で「コミュニケーションとは、わかりあうためのものではなく、わかりあえなさを互いに受け止め、それでもなお共に在ることを受け容れるための技法である」という。ジャックも含めて、この次元まで少しでも近づいているディベートは可能なのだろうか。いや、ディベートだけでなく生徒という生命体とともに在る時間に、空間に、分かりえなさを包摂する空気は醸成されているだろうか。

ヤポネシア 12

島成郎と安俊弘

芝野 浩貴 (地球探検家)

沖繩プロボノの8回目の地は久米島であった。

沖繩県の離島で高校のある学校は宮古島(54号)、石垣島(66号、72号)と今回の久米島の3島なので、沖繩県離島高校へのプロボノをコンプリートしたことになる。地べたニストとして久米島を捉えた時、斉藤幸平の新聞風に本を書くならば「ぼくは久米島で車海老を養殖し、ウミガメと泳ぎ、珊瑚の海に歓喜した」というタイトルをつければいいのかもれないが：

私が斉藤氏を引用したのは以下の3つの理由による。

① 新刊の内容は私的には日々実践していることなので、それはそれとして、どちらかという理論肌の斉藤氏が後書きに「安克昌」さんについて触れられていることが気になっていった。(私も音信不通75号で安克昌氏を引用していたので)

② 久米島高校での講義の後に、那覇市に移動して数学カルテット(正式名称は第5回教員指導力向上対策研修会)を行っていたのだが、同じ日の同じ時刻に2キロ離れたところ

で、斉藤氏は玉城デニー知事と新刊の出版記念も兼ねて沖繩振興計画についてのトークイベントに参加していた。

③ 数学カルテット(私以外の講師は哲人と、京都の高校で教鞭とりながら参考書や問題集を作り続けるT氏と、40年間大手予備校S台のトップ講師として東大クラス・医学部クラスを教え続ける問題作成のベテランのK氏)解散後に、ジョニー(横田泉さんの呼称で横田氏との出会いなどは58号、61号参照。以下ジョニーと記す)

に紹介していただいたくじらブックス(68号)を個人的に再訪したのだが、斉藤氏の訪問後であったこと。

久米島も多くの離島と同じ悩みを抱え、少子化対策として「久米島魅力化プロジェクト」を企画運営し、内地から離島留学生を募集している。魅力化プロジェクトの灯りは隠岐島にあると私は思っていて、昨年は「隠岐の数学」を探究したが(66号)、「久米島の数学」を考える時は、前述のウミガメの考察は避けられなかった。これまでも国内の海亀産卵地(日和佐のうみがめ博物館など)を訪れ、海亀の生態を直視はしていたが、深掘りができたのは、小笠原諸島でウミガメの世話をしたことのあるAライン(66号、68号)の情報が大きい。そのうちの一人は、菅沼弘行氏(「ウミガメは200キロ沖で恋をする」一方丈社、などの著者)である。

久米島の名所に安山岩が急に冷えてできた柱状節理の八畳石があり、その成り立ちが幾何学の敷き詰め問題に繋がりが、亀の甲羅の成り立ちにも関係する。アオウミガメとアカウミガメの識別は、頭の甲羅の形や背中の中甲の枚数で見分けたりするのだが、地元の高校生に対して、そんな話をした。

Aさんとは内地でのコラボ以来であった。その時は、「弱さ」の再構築の探究学習(75号)で、高校の先生方の「弱さ」×「歴史」、「弱さ」×「生命」、「弱さ」×「エネルギー」、「弱さ」×「語学」の探究授業後に、私が前座として「弱さ」×「数学」の話をして

Aさんに繋いだ。その時のAラインは若松英輔であった。ハンセン病詩人、志樹逸馬、の詩の朗読から始まった。頭でっかちの一方的講義とは一線を引く「地べたニスト」の語りは、生徒・保護者・先生方の心に染み入る時間となった。

私の那覇滞在中に、わざわざジョニーに会いに足を運んだAさんから連絡があった。

凄いだらまの演奏を聴いたが、80代の人だった。そんな高齢で素早いスティック捌きができるわけないと思っただが、心当たりがあつてジョニーに演奏者の名前を聞いたら、予想通り伝説のドラマー「ウチナー・ビート」の上原昌栄さんだった。それだけでも驚いたが、何故ジョニーが上原さんと親交

あるのか尋ねたら、もつと驚いた。ジョニーが学生の時に島成郎さんに紹介してもらったと。ジョニーの表の顔は精神科医なので、島成郎さんをリスペクトするのはわからないでもないが、よく聞くと「鶴見俊輔―徳永進」ラインと同じような関係だとわかった。

(鶴見俊輔は志樹逸馬とも交流していた)

詳しくは「評伝島成郎」筑摩書房、に委ねるが、著者の佐藤幹夫さんとも交流があるらしい。更に、ジョニーに斉藤幸平と安克昌の繋がりを聞くと、安克昌の弟さんの安成洋と知己らしいので冒頭の疑問は解けた。安成洋さんは「安克昌の臨床作法」日本評論社、では、自らが監督をした映画の「心の傷を癒すということ」について寄稿されてるが、安克昌著の「心の傷を癒すということ」作品社、の新增補版のあとがきでは、長男の安俊弘氏にも触れている。原子力工学の専門家だからこそ、脱原発の出口戦略を訴えて亡くなった兄の追悼を交えて。

ジョニーが島嶼医療を始めたのは島成郎の影響らしい。私たちの離島プロボノも引き継ぎたいところだ。私には、既得権者の正しい言葉と為政者の嘘の言葉の違いがわからない。カテゴリーに人間を回収しない「ジョニーライン」には魂を揺さぶられる。

散歩嫌いの記

ムラカミヒロミ

(フライング・ブックマン)

雪のない正月になりそうである。

初詣や、お年始回り、騒音のない長閑な空気の中、のんびり散策でも、と考える向きもあろう。

が、のっけから愛想なしで申し訳ないが、筆者は散歩が嫌いである。というよりも、苦手である。というか、できない。

目的もなしに、ただブラブラ歩くということが苦痛ではない。詰まる、詰まらない、という問題ではなく。

出かける時は、本屋に行くとか、ホームセンターに行くとか、理由がなければ外出しない。本屋なら、あれこれの本を買う(あるいは探す)、HCならなにかれの品を買う(あるいは探す)という明確な目的が要る。必要なものなければ、出かけない。

変ですかね。

旅行も同様だ。ただの物見遊山には興味がない。誰それの展覧会があるとか、コンサートがあるとか、そういう目的がないと神輿が上がらない。単に気候が良くなったとか、手元に小金があるとか、そんな理由では動けない。

おかしいでしょうか。

考えてみれば、待ち時間、というのも苦手なもののひとつである。

病院の待ち時間は、構わない。初めから「待つ」ことが織り込み済みである。時間を潰すための文庫本を一冊持つて行けば事足りる。いつ何時、どこで切れてもいのように、なるべく考えなくていいものを選ぶ。捕物帳あたりが最適ですね。一編三十分。大抵、一編読み終えて、二編目の途中くらいで順番が来る。

交通機関は、どうしても早目に出かけることになる。しかし、これも、予定の行動である。待ち時間の上限が分かっている。

困るのは、ダイヤの乱れ。何分待てばいいのかわからないと途方に暮れる。時刻表が改正されていて、予定の便

が出てしまった後、というのも困る。次の便まで、三十分とか、四十五分とかいうのが最も困る。十分なら、まあ待てる。二十分だとちよつと怪しい。三十分を超えらるとういけない。一時間は憤死する。

それでも、列車の場合は仕方がないから無聊をかこちながら待つ。売店があれば、新聞でも買って潰せるが、当節、無人駅が多い。やむ無く駅前の散策でも、と考えた所で、駅が無人になるくらいの場所である。商店街などある筈もなく、街並みの端から端まで行って帰ってものの五分。うかつに、じつくり眺めたりしたら不審者だ。駅舎に戻って、時刻表からポスターから、隅々まで細大漏らさず読み、それもなくなったら、切符を見る(無人駅だと切符もない)。近頃の切符は、裏面が磁気仕様だから読むところが少ない。後は寝たふりをするだけである。

バスの場合、十五分以上来ないと分かったら、さっさと歩く。吹きつきさきで十分以上ポーッと待つのは御免である。停留所の一区間や二区間は何程のこともない。稀に追い越されることもあるが、行程を半ば過ぎててもやって来ないと、最終目的地まで完遂してしまう。

気が短いんでしょうか。

レストランや喫茶店では、料理が来るまでは長くても構わないが、食べ終わつた後は、五分とじつとしていられない。尻がムズムズしてきて、早く出なきや、という気になってしまふ。ウェイティングの客がいれば、これ幸い大手を振って出られるが、そうでない場合は、いかにも余裕がなさそうで気恥ずかしい。一杯のコーヒーで、一時間、二時間ねばれる神経が不思議でたまらない。

結局、何なのだろう、無駄な時間を過ごすのが嫌、ということなのだろうか。

そう言えば、人から「何かいい気晴らしがないか」と聞かれ、散々首をひねつた挙句に何も思いつかなかつたことがあつた。そもそも、「気晴らし」とか「暇つぶし」といったことに無縁であつた自分が付いて、愕然としたのだつた。やるべきことは常にあるし、やりたいことも山ほどある。無為な時間とか、ポツカリ空いた時間、といったものは存在しないと思つていた節もある。

どうやら、そういう性分であるらしい。

鳥取あれこれ その七十七

内田 克彦（地域研究家）

一八八七（明治二〇）年九月に開校した「鳥取英和女学校」に対抗して、「鳥取婦人会」により一八八八（明治二一）年一月に開校した「私立鳥取女学校」は、一八九〇（明治二三）一月には、「私立鳥取高等女学校」となり、一八九七（明治三〇）年四月に、市に移管されて「鳥取市立鳥取高等女学校」となり、一九〇一（明治三四）年四月からは「鳥取県立高等女学校」となった。

ところが、一九〇六（明治三九）年に岩本芳八が創立した、同名の「私立鳥取女学校」については、あまりよく知らなかった。墓は寺町の光明寺にあり、その墓碑を翻刻した文が西尾護『旧鳥取市の石碑』に載る。

君の名は芳八、戸次久八君の二子にして、入りて岩本氏の嗣となる。弱冠にして東西二京に遊びて簿記を研修し、数理を諸学に教育す。後技芸学校を松山市に開き、薰陶して甚だ勤む。已にして罷て帰り、私立鳥取女学校を創り、日夜孜々として教育の発展を図る。今春疾に罹

り医治するも荏苒して五月二十九日遂に起たず。年四十
一。〔以下略〕

ウィキペディアによると、「岩本孫右衛門」の子孫として「十代芳八は私立鳥取女学校の創立者（明治三九年四月二十四日の「鳥取新報」に記載あり）。」とあったので、当該「鳥取新報」を見てみると、次の記事があった。

多年他郷に在りて教育の事に従ひ去三十六年愛媛縣松山市に於て技藝學校を創立し卅七、卅八、卅九年の三年修業者を出せしも今回家事の都合に依り帰郷せざるを得ざるに至り技藝學校は他に適當の人を求めて之を譲り当市に前記の〔私立鳥取〕女學校を設立に至りたる由〔略〕教師は家事、裁縫手藝は同氏の妻女にして多年愛媛縣高等女學校に就職せし岩本あい子と云ふが担当する筈にて他の學科は目下鳥取高等女學校教員に交渉中なりと〔略〕当分の内元大工町土橋詰に仮校舎を設くる由なり

なぜ鳥取出身の岩本が、松山で學校を創設したのか調べようと、愛媛県立図書館に問い合わせた。疑問は解けなかったが、教えて頂いた各種文献（『海南新聞』一九三六年

二月六日付、『済美学園百年史』等）に基づき、まとめた結果は次のとおりである。

一八九五（明治二八）年、松山在住の岩本は家庭的技芸の教育のないことを遺憾として、川淵町に裁縫家塾を開き、専ら女子に斯道を教授していたが、私塾としては諸施設上物足らぬ事に鑑み、一九〇三（明治三六）年四月七日、県の認可を得て学校組織に変更し初めて私立松山技藝女学校と命名して完全に近き教育道場を作った。

生徒数の推移 明治三六年 三八

三七 七五

三八 一一三（三九） 九一

一九〇六（明治三九）年に帰国の止むなき事情に立ち至り、潮見琢磨が神宮奉斎□愛媛本部の補助のもとに経営した。

因みに、私立松山技芸学校は、一九〇七年四月に予定された「私立澤田裁縫女学校」（現在、済美〈さいび〉高等学校）と合併して愛媛女学校とすることを取りやめ、「実業学校令」により一九四一年四月から「松山高等技藝女学校」に改組、松山空襲により全焼、戦後「私立松山城西〈じょうさい〉高等学校」となった後、一九五五年三月に閉校（その際、教諭たちが済美に移籍）、売買契約・法人

名義変更により愛光中学校・高等学校となる。

さて、私立鳥取女学校については、『新修鳥取市史 第五巻』の「教育篇」に詳しく書かれており、岩本の写真も載っている。それによると、岩本の死によって廃校寸前の状況に陥っていた鳥取女学校を存続再出発させたのが、山田亀である。師範学校の時代の師である遠藤重を校長に迎え、師範学校時代からの親友坂根（旧姓高垣）としての援助を受けた。山田亀は、小沢咲の実妹であり、ともに最初の「鳥取女学校」創設運動の主力メンバーとして活躍した人物である。一方、坂根としては、尾崎放哉の妻となった馨の母親である。

この「鳥取女学校」は、「私立静修高等女学校」と改称され、一九三三（昭和八）年四月に、市に移管されて「鳥取市立因幡高等女学校」と改められた。一九三六（昭和一一）年に鑄物師町に移転、一九四〇（昭和一五）年、「鳥取市立高等女学校」と改称。一九四九（昭和二四）年に廃校となり、その校舎の一部を使って前々年に開校していた鳥取市立西中学校が使うことになった。

八代日記

(三十四)

齊藤 仁昭

(ケバフジョンソン・

元長崎書店)

十二月某日

サッカーワールドカップが閉幕した。大会の是非や、各試合のこととはさておき、ジョルディ・プンティ(Jordi Puntí)と言うバルセロナ生まれの小説家・コラムニストの書いた、「メッシのW杯優勝IIサッカーそのものの勝利・孤高からリーダーへ、現実から永遠へ」という記事が面白かった。メッシとバルサ、そしてサッカーを愛している筆者のメッシへの礼賛が綴られるのだが、おもねったような礼賛ではなく、詩的で神聖な賛美が清々しかった。人間の情熱や奇跡を讚えるような、こういうヨーロッパ的(?)な文章はとも興味深い。スペイン語圏のことがもつと知りたい。何から勉強するとよいのだろうか。

プンティ氏曰く「メッシがW杯で優勝しないフットボー

ル界は、カインド・オブ・ブルーの存在しないジャズ界と同義」、「不安と、恐怖と、感動と、数えきれない抱擁と、何リットルもの喜びの涙」、「アルゼンチンの勝利は逆境にも負けることなく運命の終着地点、新たな世界を探して見つけ出すことに似ている」、「ほほほ技術だけでここまで決定的な存在になれるというのは現実を超越している」、「彼だけが、レオ・メッシだけが過去を修正する力を持っている。」などなど。

どこかのテレビ局がどの試合にも「運命の一戦」とテロップをつけている安易さとはわけがちがうように感じてしま

う。

十二月某日

同じ部署の方がコロナ陽性となってしまった。一週間の自宅待機となってしまふ。師走に入り、自分も職場の人々も疲れがはじめており、今後気温が下がってくるようになってきたら蔓延しちゃうんじゃないかと怖くなってしまい、面倒くさがって予約しそびれていた四回目のワクチンをすぐ予約した。ついでにインフルエンザのワクチンも接種することにした(数年に一度は必ず確ってしまふので)。

先に、かかりつけの病院でインフルエンザワクチンを

打ち、コロナワクチン集団接種の会場へ移動する。問診票に、今しがたインフルエンザワクチンを接種したことを記載してあるのを見たお医者さんが「一箇所でもどちらも接種できたらいいのにねえ」と言っていた。そうですよね。でもそれも大変そう。

誰が欠けても中々業務の回りにくい少人数体制なもので、特にクリスマス前の時期の欠員は商品を納品できない可能性に繋がるので、心配でしょうがない。しょうがないが日々の業務は続けていかねばならない。余裕がないなあ、陽性になった彼女の分の仕事も一週間なんとかこなし、彼女もすっかり具合が良くなり元気に出勤。なんとかのりきったねと皆で安堵したが、しかし数日後ついに自分も陽性となってしまった。

熱は出たがそこまで具合は悪くもなく、喉に症状もなかったので陰性だろうと思っていたがちがった。喉や熱は軽かったが、鼻づまりや鼻水などの鼻の症状はそこそこきつく出る場所もそれぞれなのかしら。感染経路はわからない。

家の中でできるだけ家族と接触しないようにじっと過ごす。じつと過ごしたのち、家族にもうつさずに済み、無事に職場に復帰できた。クリスマスと正月の繁忙期直前にかかってかえってよかったのかも知れない。ごろごろしすぎたせいで、足の筋肉が落ち、足がすごく細くなってしまっ

ている。しかし久しぶりにゆっくりごろごろできて精神的にはだいぶんリフレッシュできたように思う。

十二月某日

食材を買いにスーパーに行くが、物価の値上がりがほんとにキツイ。キツかですばい。今までの物価が安過ぎたのも間違いないだろうけど、今後うまくバランスを取れていけるのだろうか。あんまり近未来は明るくないような感じがする。

まあでも3食食べられなくても、本が買えなくても、図書館行って、家でレコード聴いてれば大丈夫か、と思えるのでさほど暗くはならない。でも子どものことはちょっと心配になっている。

「見栄っ張りな風物詩」亦は「大苦狂騒楽」

秦阜 梅林

(楽人)

ベートホーフエン第九交響曲を歳末の「風物詩」に仕立て上げてゐるのは勿論日本固有の経済的事情。文化的、教育的背景があつての事では無ひ、断じて…

1

とは言へ僕は何度か其の舞台に立ち実演に参加して居る

…

最初は12の時、未だ70年代、N某と言ふ大手珈琲メーカーのGBコンサートなる全国展開キャンペーンの一環で高知初演時最年少参加者として第一ヴァイオリン末席のプルトを担つた。放送局のホール、石丸寛指揮、レコーディングセッションに加はつての実演参加は無論初めて。

其れから10余年、二度めはヴァイン、於コンツェルトハウス大ホール、大晦日の夜東京から客演のFMT某合唱団?と銘打つた日本人計りの団体に第一テナーの一人としてアルバイト(因みに高音域を歌ふ難しひ第一ソプラノ・テナーは殆ど現地ヴァイン音大の同僚や友人達と)クルト・ラップフ指揮国立ハンガリーナシヨナル管弦楽団や、

圧倒的な声量を誇るオペラスターK・リドルとの共演は愉しひ経験だつた…

2

つまり、いつもお祭り気分の上ペクタクスイベントの文字通り神輿を担がされて居た訳である。

此れは「日本人が正しくベートホーフエンを理解してゐる」から?とか「合唱やドイツ語を学ぶ伝統が培はれてゐる」から…其の「レベルが高ひ水準にあるから」…況や「ベートホーフエンが市民に深く愛好されてゐる」から…とかでは全く無く、或る一部の連中が専ら経済的な理由から聖ヴァレンタインやクリスマスと同じく「喰ひ物」にする為、担ぎ易く、利益灼かなベートホーフエンと云ふブランド看板を掲げ県単位のお祭りに仕立て上げた商戦の賑やかな飾りに過ぎなひ。

3

ドイツ語圏では、ベートホーフエン晩年の「日く付き問題作」であり屈指の難曲でもある此の曲は實際滅多に演奏されなひ。その90%が日本、そして米国や韓国からの観光客と言ふ年末興行以外には。

東西ドイツ統合、ベルリンの壁崩壊…の際の如き歴史的な「特別な晴れ」の日に「記念」として演奏されたり、何かの災害や戦禍復興のシンボルとして採り上げられたり、

其れ程ベートホーフエン（シラー）は欧州の人にとつて心から尊敬されており、第九で明示された精神的な理想は決して嗤ふべき哀れな俗物の虚像では無く信すべき高邁な志と掲げられる…高々。

4

もし将来、合唱や管弦楽、或ひはドイツ語の指導者として現場に復職する機会が訪れるなら？ 僕は「第九から入る…」如き日本式の愚行は特に慎みたひ。それは入門編や単なる年末の風物詩…と言つた安直な存在では無く遙かな到達点、目指すべき天国の門である、と先ず高らかに宣言することからはじめたひ…と思ふからである。

2022 Advent

今回の一枚

L.V.ベートホーフエン第九交響曲ニ短調「コラール」
Op. 125 (1822~24)

①A.ギーベル、E.ヘフリガー他ニューフィルハーモニア管弦楽団合唱団O.クレムペラー指揮 (rec. 1964 ロンドン) DVD

②I.ゼーフリート、D.フィッシャー・ディースカウ他、ベルリン・フィルハーモニー他F.フリッツチャイ指揮 (rec. 1961)

③M.シュターダー他RTFフランス国営放送響

P.モントウ指揮 (1958. シャンゼリゼ劇場ライブ)
④W.リップ他パリ音楽院管弦楽団C.シュリーリヒト指揮 (rec. 1958)

⑤K.T.カナワ他ロンドン交響楽団、同合唱団E.ヨッフム指揮 (rec. 1978)

⑥クリーヴラント管弦楽団 同合唱団(合唱指揮R. ショウ) G.セル指揮

⑦J.サザラント.A.デルモータ他スウィス・ロマンド管弦楽団他E.アンセルメ指揮

⑧リスボン・グルベンキアン合唱団、18世紀オーケストラ他F.ブリュッヘン指揮 (1992年、ユトレヒトライブ)

⑨ハムブルク国立歌劇場合唱団(北独放送合唱団

北独放送交響楽団他G.ヴァント指揮 (rec. 1986 北独放送録音)



(イラスト・秦阜梅林)

ままならない体と動き続ける心

『傷を愛せるか』と二〇二二年の末

三浦 永理

(青翔開智中学校教員)

私は果たして何を知りたいのだろうか。何を形にしたいのだろうか。

どうも他の人は、私よりも、生きること、考えること、言葉にすることをナイーブに考えていないらしいと気付いたのは最近の話だ。私は考えすぎている。少なくともある面においては。おそらく、人がその日の献立を考えたり、仕事をいかに穏便に済ませるか考えたりする時間の一部をトラウマと共に人はどう生きるのかとか、なぜ戦争は起るのだろうか、なぜ差別は起るのだろうか、考えてもどうにもならないことを考えている。

年末、とうとう体にガタが来た。身を粉にして生きていくなんで辞めようと思っていたら、身体の方が先にSOSを出してきた。詳しい話を書くほどではないが、「これが体を壊すということなのか？」と内心ヒヤヒヤしながら渡された薬を飲む生活をしている。

独り暮らしで体調を崩す時ほど、ナイーブな気持ちにな

ることはないだろう。この世でたった一人、自分だけが自分のことをケアできる。ものを食べるにも、薬を管理するにも、病院へ行くにも、頼りになるのは、調子の微妙な自分だけだ。

倒れるほどでもないというところが今回の不調の絶妙なところで、頑張れば日常生活を送ることができると。「それなら、「頑張れ」と根性論丸出しの私が、弱気になっている自分を鼓舞する。「頑張るにしても、どこまで頑張ろうか」という気持ちにもなるのだが、それを決めるのは他でもない自分であろう。そして、私は決めることができなのまま、「頑張る」のループの中にいる。

こんな風になりたくて大人になつたわけではない。

と吐き出してみて、やっとこれだけ惨めな状態になって、私が求めているものの一端を知る。私はきつと近くに家族のようなものが欲しい。今は、私のことを大事に思ってくれる誰かが、自分の血の繋がった人以外いのではないと思わされる。そんな状況が、暗闇みたいになって目の前に現れると、トドメを刺された気分だ。そこから逃れたいと絶望している自分がある。しかし、私とその求めるものを手にするまで、いくつもの壁があることを、他の誰よりも自分が一番わかっている。

他人からすれば、「そんなことを書いてる時点でモテないのに、大丈夫？」ということだろうけれど、そんなに単純ではない部分もある。実は、この十年くらい私なりに傷付いた過去と向き合って、それを乗り越える難しさを感じている。向き合っても、過去は変わらない。だが、そこを乗り越えないと他人と家族になつたりもしないだろうと諦めてすらいる過去だ。

『傷を愛せるか』（宮地尚子）の文庫本を読みながら、考えていたのは、結局「傷を愛する」ことは私にはできないということだった。私はその見たくもない傷があつて、よかつたと思つたことはないし、ましてや「愛する」など、という気持ちがある。それでも、「傷と共に生き続ける」とをこの本は肯定していた。

このエッセイ集で語られる傷は、筆者の専門であるトラウマだけでなく、DV、戦争などの観点から語られ、最後にベトナム戦争の戦没者記念碑の話になる。確かに、傷は醜く、多くの人が忘れたり、無視したりする努力をしてみよう。戦没者記念碑が傷のようにワシントンの中心に存在することに、ある意味で可能性も見出される。

なぜ人は忘れること、忘れられることに恐怖するのだろう

う。なぜ形にして残すのだろう。そして、語り継いでいくのだろう。そういう問いに惹かれながら、「なんでそんな暗くなることを考えるのか」と聞かれもする。

恐らくそれは私の傷にも関わることだが、それだけではない。きっと、私の「幸せ」がどこかでそういう重苦しい現実に包まれたものであるということ忘れてはいけなさと子供の頃から無意識に感じているからだ。「幸せ」や発展上昇の幻想の夢に囚われなくて、私は、その傷にも意味を見出したい。悲しみや苦しみは無視されるべきものではなく、そこから始まるものも、いや始めなくてはいけないことも、大いにある。「幸せ」につながるなくとも、「傷と共に生き続ける」ために。

私が知りたいことは、まだ霧がかかっている。何よりも知りたい本当の問いはまだ私の目の前には現れない。それでも、周りが何と言おうと、知りたいことには立ち向かいたい。そして、結局それが行き着くのは、恐らくどのような形であれ、「記憶」「語り」にまつわるものではないかと、今の私は期待している。

傷を抱えて、少しの不幸と共に私は「幸せ」になろう。生き続けよう。そのためにも、まずは健康でありたい。

お酒

あきの素生

(くうねるめがね)



飲まない方が、いろんなことがきちんとできるし、時間が正しい早さで進むし、翌朝目覚めがすっきりしている。にもかかわらず、今日は餃子だから、とか、おいしそうに飲むなあこの俳優さん、とかを理由についつい飲んでしまうのは、やっぱりお酒が好きだからだろう。

遠出できそうなタイミングをこごとくコロナに潰されて、一年以上帰省できずにいた。一年目の正月は、非日常に発奮したのか、飾り切りに挑戦してみたり、器に凝ってみたりした。小さい鏡餅を買って一緒に並べ、お気に入り

の清酒グラスで地酒を飲んだ。二年目には非日常は日常になり、日常がはみ出して、正月らしきの欠片もなく、普段どおり過ごした。その後、いろいろと緩和されてきたおかげで、実家に帰ることができるようになった。親戚で集まっていたときほどではないにせよ、大晦日に年明けを待ちながらこたつで飲むビール、正月の朝にいたく御年酒、初詣に行った神社でふるまわれる御神酒と、毎日のようにお酒を飲む年末年始が帰ってくる。

もともとお酒は好きだ。が、年々気持ちよく飲める量が減ってきたこともあり、普段はあまり飲まないようにしている。お酒を飲むのは、基本的にはハレの日と休みの前日。

コロナで遠ざかっていたことのひとつに、外で飲むお酒がある。少しずつではあるが、その機会も戻ってきてつつある。外で飲むお酒は、おいしくて楽しい。お酒自体もさることながら料理も格別で、家で飲むよりもずっと、たくきんのお酒がすすいと入ってくる。よい具合に自制心や自意識がゆるんで、ことばもすすいと行き来する。

そうやってお酒を飲んだ次の日の朝は、意外と元気だ。そして、お味噌汁が飲みたくなる。お茶漬けでもいい。しょっぱいものを飲んでいる。

午前十時を過ぎた頃、ときに試練が訪れる。頭痛、悪心、倦怠感と、後悔が押し寄せる。あそこでやめておけば、と虚ろに思う。

でも、おいしいものをたっぷりと食べながら飲んだお酒は、たいていの場合翌日に残らない。具合が悪くなったときでも、頭を低くしてお昼まで耐え抜き、昼食を食べると、そこからゆるやかに回復していく。しっかりと食べること

が、楽しくお酒と付き合うことだ、と思う。

海外の映画を見てみると、何でもない生活の中で、気軽にワインを飲んでいたりする。真夜中に、明日も仕事だというのに、そんな水みたいに。難なくアルコールを分解してくれる肝臓を持っているのだなど、変なところで感心してしまう。お酒に強すぎてどれだけ飲んでも何も変わらないう上、お酒の味が好きじゃないから飲まない、という剛者の話を聞けば、体質を交換してほしいと羨んだ。まったく酔いたくないわけではない。少し浮かれて、少しのことでも笑えるくらいがいい。ただ、体に何のダメージも受けずに飲むことができたなら、もっといろんなお酒が味わえるのと思うのだ。

お酒の魅力のひとつは、その土地その土地でつくられているものがたくさんあるところではないだろうか。地酒、地ビール、ワインやウイスキーも、地のものがつくられている。日本全国（海外でも）のおいしいお酒を求めるものいいが、自分の住んでいる土地のお酒を堪能したい気持ちもある。

ビールは比較的気軽に飲めてどんな料理にも合い、炭酸が心地いいので特に好きなお酒だ。夏場は缶ビールが一日

のごほうびになったりする。一方で、クラフトビールが人気になって久しい。あの個々のビールが持つ独特の香りや味わいも好みだ。鳥取にもいくつもあるし、個性が強い分、いろいろ飲み比べてみたくなる。

こんなとき、強靱な肝臓があればなあ、と思う。もちろん叶わぬ願いなので、自分をいたわりながら、ぼちぼち楽しむことにする。

最近、
たし巻き卵が
お気に入り



・編集後記

重宝していた近所のドラスト兼業務スーパーからペット用品コーナーがなくなってしまったので、某「驚安の殿堂」に遠征してきました。年末ということもあり、すごい人だかりとてつもない圧縮陳列。

普段はわりと品揃えの多いところから選びたいほうですが、あまりに選択肢が多すぎるのも疲れるもんだなあ実感しました。店内の地図がほしい。



ドラメリア(編集長)

二十日(日)は本格的に雪が積ると予想されたが、それほどでもなかった。でも雪起こしの雷の音を聞くこともなく雪の季節がはじまるのはめずらしいことだと思った。予測の付かないことの多い時代ですね。

奈良敏行(発行人)

